

幸い、陽二は猫舌だ。まだしばらくは時間を稼げるだろう。

「ちえっ」

そう言いつつも、陽二は素直にコーヒーに口をつける。

「うん、うまい。想はやさしい上に気が利いてて、ホント、すごいよなあ。俺なんて、想がいなきゃ、生きていけないし」

「うそつけ、バーカ」

かんちがいしたくない。だから、陽二の甘い言葉は、すべて聞き流すことにしている。

もともと顔がいい上に口がうまいから、もてるのだ。ほめるのなんて、お手のもの。ただの社交辞令として聞いとくぐらいでちょうどいい。

「ホントだっけの」

じつと見られて、目をそむけなくなった。

いまだけなくせに。気弱になったときじゃないと、こうやって頼ってこないくせに。

そんな陽二をはねつけられないのが、すごく悔しい。

「そんなことはどうでもいいから、さっさとつづき話せ。話すことがないんなら、帰りやがれ」
「傷ついた俺に、どうして、想はそんなに冷たくできるんだよ」

唇をとがらせる陽二を殴りたくなるのを、ぐっとこらえる。

相手は酔っている。まともに相手にするな。

「俺には想しかないのに。孤独なのに。寂しいのに。そんな俺を……」

「うっせーっ！」

想はわめいた。

「毎回、毎回、女にふられたぐらいで落ち込んで、ヤケ酒飲んで、うちにあがり込むようなやつを、まともに聞いてやってくるだけ、俺は親切だ！」

そう、陽二が想の家にやってくるのは、彼女にふられたときだけ。電話がかかってくる時もあれば、突然やってきて、エントランスのインターホンを鳴らすこともある。たいていはベロベロに酔っていて、迷惑をこうむるばかり。

だけど、それを無視できない自分の弱さがいやになる。

もしかしたら、二度とうちに来てくれないかも。

そんな思いにとらわれて。それでもいいじゃん、とふつきれなくて。

こうやって、陽二の相手をしてしまう。

恋というのは、本当にやっかいだ。

「俺、なんでふられんだろ……」

うわ、めんどくせえ。落ち込みモードだ。さっきのグチのほうが、まだましだった。

ここで、顔はいいけど中身はへたれで、つきあってみたら想像よりもつまらない人間だったからじゃね、と常日頃から思っていることを口にすれば、陽二はいま以上に落ち込むか、激怒

するかのどっちかだろう。おまえと友達やめる！　とまで言われかねない。
そんな危険は冒^{おか}せない。

恋人になりたいわけじゃないけど、親友の地位は絶対に手放したくない。
だから、いつものとおり、無難な答えを返す。

「見る目がねえからだよ」

「俺の？　それとも、彼女の？」

「両方」

想は肩をすくめた。

「おまえを選んだ彼女も、その告白にうなずいたおまえも、見る目が無い」

「今度こそ、うまくいくと思ったのになあ」

陽二は、あーあ、とため息をつく。

「なんで？」

歴代の彼女たちと、さつきふられたばかりの彼女にちがいはなくてあったらどうか。ただ、陽二の表面に魅^ひかれて告白してきては、見た目よりも男らしくない、どっちかというところグチグチしている性格にうんざりして離れていく。

その繰り返しだ。

「顔が好みって理由でつきあわなかったから」

どうだ、とばかりに胸を張る陽二に、目の前のコーヒーをぶっつけたくなった。

陽二といるといらいらしてばかりで、話を聞くと頭にきて、黙れ、ボケ！^{だま}と心の底から思うのに、それでも陽二が好きだなんて、自分はどこおかしいんじゃないだろうか。

いままで陽二とつきあった女たちのように、顔だけに魅かれたんだったらよかった。そうしたら、いまごろ、ただの友達になれていた。

土曜の夜七時という、想が一週間のうちで一番まったりできる時間に急襲されても、無視していられた。

本当に、自分は趣味が悪い。

陽二の性格のほうに魅かれたなんて、前世で何かとんでもなく悪いことをしてかしたバツにちがいない。

「…そのどこが、うまくいく要因なのか説明してみろ」

きつと、くだらない答えが返ってくると知っていながら、ちゃんと聞いてあげてしまう人のよさを、だれかほめてくれ。

「いままでではさ、あ、かわいいな、って思った子じゃないとつきあわなかったわけ。でも、俺は気づいた。かわいいからって性格がいいわけじゃないんだ、ってことに。っていうか、むしろ、かわいいことをかさにきて、性格悪い子が多い」

それはおまえの偏見だ。だけど、訂正すると話が横道にそれで收拾がつかなくなりそうなの

で、放っておく。

「つまり、かわいくない子だったら性格がいいはずじゃん？」

「おまえはバカだ」

出会ってから、ずっと知っていた事実を言葉にした。

バカだから見捨てる、という方向にいなかった自分を悔やみながら。

「顔がよくて性格がいい子もいれば、顔が悪くて性格も悪い子もいんだよ。性格と顔は連動してるわけじゃねえって、なんで、あんだだけたくさんつきあってきて、そんなことすら学ばねえんだ、アホ」

本当に本当に本当に、いらいらする。

「だって、俺を好きになってくれる子が、みんな性格悪いんだもん」

「他人のせいにすんな、ボケ！ だいたい、告白した子としかつきあわないこと自体がまちがってんだよ。おまえから、だれか好きになればいいじゃねえか」

「んー、俺、愛され体質だから」

真顔で寝ぼけたこと言うな！

冷めたコーヒーじゃなくて、熱湯をぶっかけたい。いまからお湯を沸かし直そうか。

「俺が好きになる前に、相手に好きになられちゃうんだよねー」

「んじゃ、すぐにつきが見つかるよ。気がすんだか？ 俺、メシ食うのに戻っていい？」

バカばつか言ってるじゃねえ、と怒鳴つても、諭さとしても、効き目がないのはよくわかつている。だいたい、こんな言葉しか返つてこないと知っておきながら質問した自分が悪いのだ。だから、もう放っておこう。

ビーフシチューは温め直せばいい。フランスパンはもうちよつとカリつと焼き直して。あとは、明日のためにと取っておいたチーズも持つてこよう。

今夜はたらふく飲んでやる。明日は日曜だし、二日酔いでも気にしなくていい。

「あ、俺も食いたい！」

「…は？」

はいはい！ と手を挙げる陽二に、想は眉をひそめた。

「ふられた女と食ったんじゃねえの？ で、食事が終わって、金を払ったあとで別れを切り出されて、そのままヤケ酒を飲みに行つて、うちに来たんだろ？」

話を聞いてもらうために。

「ごはんじゃなくて、想が食べたい！」

堂々と言う陽二に、想は、ぽかん、と口を開く。

いま、なんて言つた？

「ふられたときは、いっつも想が慰なぐさめてくれんじゃん？」

にこつと笑う陽二にうなずきそうになって、想は慌てて首を横に振つた。